

〈研究ノート〉

「教育音楽学会」の活動について

高 牧 恵 里

要約

音楽家が音楽教員養成において指導すべき内容は、音楽技能、演奏技能だけではない。特に幼児における音楽教育については、人間教育という視点から行うことが必要である。

ここに「教育音楽」という理念がある。私は、この理念と音楽教育と人間教育の関係について調べることを目的に、2007年、教育音楽学会の設立に関わった。

本稿は、この「教育音楽学会」の設立主旨や活動内容について述べたものである。

キーワード ・教育音楽
・音育

目次

はじめに

1. 〈教育音楽学会・設立の経緯について〉
2. 〈教育音楽学会の研修会（ワークショップ）について〉
3. 〈各回のテーマについて〉
4. 〈特別講義について〉
5. 〈最強の教材「カノン」とは、どんなものか？〉
6. 〈修了曲について〉

おわりに

はじめに

音楽家が音楽教員養成において指導すべき内容は、音楽技能、演奏技能に留まらない。特に幼児における音楽教育のあり方については、人間教育という視点から行わなければならない。

ここに「教育音楽」という理念がある。これは、音楽教育のあり方について、故岡本敏明が唱え始めたものである。私は、この「教育音楽」という理念を研究することで、音楽教育と人間教育のあり方について、ひとつの答えが見出せるのではないかと考え、2007年、教育音楽学会の設立に関わった。

本稿は、この「教育音楽学会」の設立主旨や活動内容について述べたものである。

1. <<教育音楽学会・設立の経緯について>>

小学校学習指導要領・第6節「音楽」には、「表現及び鑑賞の活動を通して音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」とある^[1]。

また、幼稚園教育要領の「表現」においては、「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。」とある^[2]。

これらの学習指導要領は、どのような教育理念に立脚して設定されているかを考える契機となったのは、「音楽教育」の礎を作った岡本敏明生誕100周年の集いであった。

岡本敏明の年譜は、次のとおりである。

1907年（明治40年）宮崎市生まれ。

1929年（昭和4年）東京高等音楽学院（国立音楽大学の前身）高等師範科を卒業後、玉川学園の教諭となられ、学校現場で活躍された。

1935年（昭和10年）東京高等音楽学院講師（作曲）となられる。

1936年（昭和11年）「どじょっこふなっこ」を作曲。現在でも歌い継がれている。

1950年（昭和25年）国立音楽学校・大学認可。国立音楽大学教授となる。

1975年（昭和50年）国立音楽大学を退職。

1977年（昭和52年）昇天召される。

「思い出の曲集」^[3]（岡本敏明先生ご生誕100年記念パーティ準備会 編集発行より）

また、1975年（昭和50年）岡本敏明の国立音楽大学音楽教育学科での最終講義の録音が現存しており、そこには、次のように述べられている^[4]。

- (1) 音楽があれば、『学校』、そして『国』が動かせる。音楽は、それだけの『力』を持っている。
- (2) 音楽が生活や社会の中で、人々の互いの気持ちを融和させるものになってほしい。
- (3) 一生懸命練習しなければならない曲ばかりを採用するのではなく、練習しなくてもすぐ歌える曲を歌い、なければ、そうした音楽を作っていきたい。
- (4) 「音楽（歌）」を学校の授業のイントロダクションに用いることで、クラスの授業の空気を整えることができる。

上記のように、岡本敏明の音楽教育理念は、「音楽は情操教育という枠の中で留まるというものではなく、生活の中で活用していくことが重要である」と主張している。

2007年、私は、こうした岡本敏明の音楽教育への理念や、更に、新しい音楽教育のあり方（本来的なものも含む）について興味を抱き、この研究を行っていくことを目的とした教育音楽学会の設立に関わった。会員は、教員養成に従事する教師、小中学校の教師及び、社

会教育に関わる人たちによって構成されている。会長には岡本敏明門下の岡本仁が就任した。初期の段階においては、指導者として備えておくべき技能について、再履修しようと、以来、年2回の研修会（以下、ワークショップ）を開催してきた。現在5年目、8回のワークショップを行ってきた。

ここで、教育音楽学会という名称の「教育音楽」の概念について触れておきたい。なぜ、「音楽教育」でなく、「教育音楽」なのか？

音楽には、「芸術音楽」、「教育音楽」、「娯楽音楽」の3つがある。

(1)「芸術音楽」は、作曲家が楽譜に記した音楽を再現する芸術であること。

(2)「娯楽音楽」は、流行歌や、ジャズなどの即興性を求められる音楽である。

では、「教育音楽」とはなにか？

(3)「芸術音楽」と「娯楽音楽」の間にあり、教育に用い易い音楽。即興性も持ち合わせるお遊びの要素が入る音楽である。

よって、教育音楽という言葉には、従前の音楽教育が行なってきた「音楽を教える」ということに走り過ぎず、「音楽で人を育む」という、人間教育としての音楽指導者の役割を見直し、研究し、実践しようとする願いも込められている。

また、教育音楽とは、「音楽で人を育むこと」であるが、その上で、「音」そのものとの関わり方についても教育されるべきである。特に、現代社会の音楽の氾濫（音の鳴りっぱなし）状態に何の疑問も無く放置されていることに対しては、看過できない問題がある。

例えば、

- 駅や街路の無意味な音楽
- エレベーターや電車のドアの開閉ごとのチャイム
- コンピューターや携帯電話の操作音
- 情感だけを刺激するどぎつい音響のポップミュージック等
- ヘッドホンステレオの音漏れ、着用しながらの自転車走行による交通事故^[5]

こうした音の氾濫、音の乱用が蔓延する原因の一つとして、音への無関心をあげたい。それは生まれてからの成長過程において、音への興味、関心を高める音への感覚教育への不足に起因している。音への感覚教育とはすなわち「音感教育」である。一部の音感教育機関では、特殊技能としての音感を備えるための指導を行っているが、そうした特殊な技能を目標にするのではなく、こうした音の衛生についても関心をもって対処できる感覚の育成を目標とすべきである。

これを教育音楽学会では「音育（おんいく）」と称し、新たに取り組む課題として取り上げた。

2. <<教育音楽学会の研修会（ワークショップ）について>>

各回のテーマは、下記の通りである。

表1

ワークショップ テーマ	
第1回	「カノンの再発見！最強の教材を見直そう」
第2回	「音感と指揮法を掘り下げる～カノンの再発見！最強の教材を見直そうⅡ」
第3回	「美しい音、理想のハーモニーとは」
第4回	「音感とカノンを深めよう」
第5回	「美しい音、理想のハーモニーとはⅡ、ヴィブラート」
第6回	「音感・ポリフォニー、そしてヴィブラート」
第7回	「音感・ポリフォニー、そしてヴィブラート」
第8回	「音感・ポリフォニー、そしてヴィブラート」

こうしたテーマに基づき、音感と指揮法の2本を主軸において、技能研修を行ってきた。音感は聴覚の訓練であり、指揮法は、指揮棒の振り方という一面的なものではなく、「指揮」することは、「指導」することという最も本質的な技能を身につけるといった観点から行っている。

また、それらを含め、毎回のワークショップは以下のような内容で構成してきた。

表2

題 材	内 容
「音感」	「音感」を育てるという取り組みから、「倍音」を見つけようとピアノを使って純正調の響きを聴く訓練をする。
「カノン」	カノンを取り上げ、同度の「カノン」（輪唱）から、4度、5度のカノンへと発展し、後にフーガにつながるポリフォニーの音楽を歌唱実習し、指導まで導く。
「指揮法」	『「指揮」することは、「指導」すること』という最も本質的なところから、楽曲分析・音楽史・ニュアンス法・フレーズ法・選曲法などあらゆることを多角的、分析的、総合的に新しい視点で研究した。
「修了曲演奏」	フーガの入っている合唱曲を実際に取り上げ、練習し、録音する。

ここで、本学会での音感教育の具体的手法を紹介する。

<倍音を聴く>

(1) ピアノを使って「倍音」を聴く訓練をする。

ピアノでC（ツェー）の音を弾くと、弾いていないG（ゲー）が聴こえるということで、倍音の存在を確認しやすい。しかし、慣れていないと、そのかすかにしか聴こえない倍音は聴き逃してしまうが、繰り返し訓練することで、次第に倍音が聴こえるようになり、自分の声をその倍音に重ね合わせることができるようになる。

(2) 倍音が聴こえるようになったところで、実際になっている音を耳で聴く訓練として、ピアノでたたく単音を聴く訓練を行う。

<和音を聴く>

(3) 単音の音から和音を聴く訓練を行う。

譜例1 ドイツ語でのカデンツァの読み方の一例

G ゲ	A ファ	G ゲ
E エ	F エフ	D デ
C ツェ (↑下から読む)	C ツェ	H ハ

譜例1の通り、C（ツェエゲ）F（ツェエファ→ツェツファと呼ぶ）G（ハデゲ）の和音を括弧内のようにドイツ語で読みながら聴き分けていく。

また、その和音を一定のビート感覚で刻むようにし、和音の名前をその拍子に合わせて唱えていく方法もある。これは、拍子感も合わせて身につけることができる。

＜平均率と純正調を聴き分ける＞

(4) 受講者が三和音の三つの音に分かれ、一緒に重ねてみる（ハモる）。

そのときの和音の第3音は、ピアノで鳴らす平均律の音ではない第3音が響く。これが純正調の音である。その時にピアノの音を鳴らすと、ピアノの音のほうが若干ピッチが低く聴こえる。

平均律は、どの調でも対応できるように1オクターブ内の音を均等に割り振った音律であるが、それでは調性の中で、きれいに音が響かない場合がある。倍音を聴くことで、その違いの体験ができる。

3. 《各回のテーマについて》

ワークショップは、テーマを回ごとに設定している。岡本仁会長による基調講演と連動しているので、各回の講演の骨子と、テーマについて紹介する。

第1回「教育音楽とは何か」

「飽食の時代にあって食育の提唱」があるように、「降り注ぐ雨のごとく」さまざまな音楽に囲まれた中でそれを選別する能力（環境の整備と本人の選別力）をひとまず『音育』と呼んでおく。「食育」が、「正しい食品を使い、良い食事で身体を作りましょう」というように、「音育」は“音楽”で人間（人格）教育ができないか！ということを考えたい。ここでいう音楽とは、人間教育に相応しい音楽を指す。それを教育音楽という。

メイソンが、日本にバイエル教則本を紹介し、音楽の手ほどきに使用したことから、ピアノの導入本として使用されているが、音楽の初歩の学習書として、ピアノの奏法のみならず、音楽に必要な教材が示されている。

また、カノンは、ポリフォニックな音楽で、聴覚を発達させる良き教材である。

よって、これら、バイエル教則本やカノンは、教育音楽に分類される。

第2回「水平思考と垂直思考とは」

音楽の起源やカノン論を参照しながら、垂直思考や水平思考という思考力について学ぼう。音楽と哲学との関係を考えたい。

垂直思考（一般に行なわれてきた手順にしたがって論理的に結論を導く方法）と水平思考（問題解決にあたり、従来の手がかりにこだわらず、いろいろな角度から探る方法）の2つがあるが、音楽でいうと、次の通りである。

- ・垂直的な知覚→和声法（ホモフォニー：和音とその連結の技法）
- ・水平的な知覚→対位法（ポリフォニー：いくつかの旋律とその累積の技法）

音楽様式の話として、J. S. バッハ「ゴールドベルク変奏曲」を用い、「変奏曲の仕組み」を説明する。特にゴールドベルク変奏曲の変奏の中には、カノンを取り入れた曲も多いことを知ってもらいたい。（例として、第9、27変奏など）

また、ヒンデミットの12のフーガからなるピアノ曲『ルードゥス・トナーリス』（「音の遊び」の意味を持つ）の曲より、フーガ2（ト調）を紹介する。

第3回「“音”を科学する」

音楽を学ぶ上で重要なことの一つに音響学がある。感覚的に捉えがちな、音楽を物理的な視点から捉えなおすことは、音楽の実体に迫る第一歩である。口笛やリコーダー、フルートなどの楽器の音をパソコンのグラフで表し、視覚的に目で確かめ、音と音楽との違いや、ハモリのメカニズムについて学んでもらいたい。

第4回「目で見る音の科学」

第3回と同様にパソコンを使用し、音の構成する倍音を画面に表示し、目で確認する。さらに二つの音の位相を逆にし、合成することで音量が小さくなる現象を体感する。また、周波数をずらすことによって起きる「音の揺れ」や、きれいな波形を重ねても「なじまない」ことも視覚的にとらえることのない音の実像を体験しよう。

第5回「美しい音とハーモニーの関係を科学する」

今回からあまり語られることのない、「演奏」と「ヴィブラート」について、直接演奏家に伺ってみようという特別企画を立てた。特別講義の前に、実際の音をマイクロフォンで拾い、ヴィブラートの種類やヴィブラートの有無による聴こえ方の違い、楽音を構成する倍音の音声分析を実施して、ヴィブラートの実体に迫ろう。

第6回「美しい音・ハーモニー・ヴィブラートの関係を科学する」

『ヴィブラート』は、歌を歌うときにメロディを美しく、豊かな音楽表現にする為の一つの技巧である。気持ちの優しさや感情の激しさを表現するために「声を震わせる」テクニックを用い、内面の感情を伝えようとしたと考えられる。

第5回では、弦楽器の演奏家から弦楽器におけるヴィブラートの考え方や演奏法による感情の表現法について聴いた。今回は、「声を震わせる」ヴィブラートは、大勢で歌う合唱の場合は嫌悪感を抱かせることもあるため不可とされてきたが、本当にヴィブラートは合唱にはいらぬのかを検証しよう。

第7回「ロンドとは～哲学としての音楽形式～」

音楽表現のコントラストについて、表情記号として使われる「単語」と対になった反対語を例に挙げて説明した。最初は、楽語として理解していた「単語」が、やがて音楽を離れ、人間の心の在りようを表す言葉に変化することを実感していただきたい。「音楽」と「人としての生活」が密接につながり、決して理論や理屈だけの特殊なものではないということに気付いていただけたであろうか？

(声楽曲やMozartの「Oboe Concert K.314」、「Flute Concert K.313」などの音楽を聴く。)

歌詞がついているものは、その言葉にとらわれ、音楽を感じるより、言葉で説明し過ぎると指摘されている。情景を思い浮かべて言葉で説明するのではなく、音楽そのものを心で感じとることが重要であろう。

ベートーヴェンのピアノソナタ第8番「悲愴」第3楽章の楽譜をスクリーンに表示し、ピアノ演奏と合わせてロンド形式について解説された。歌詞のない音楽（絶対音楽）にもかかわらず、人の心の変化に呼応していることがわかる。

音の世界を遊ぶ、説明しようとしないう、味わい、感じることの大切さ、よく耳を働かせ、自分の在りようと音楽の在りようを照らし合わせる、音楽を大事にしまっておくのではなく、懐に入れて持ち歩くような存在にできることが大切ではないだろうか？

第8回「変奏曲とは～哲学としての音楽形式～」

毎回、「音楽の形式」を取り上げているが、もっと広く深く「音楽」を理解して戴きたいと思う。「音楽」とは、「音」を素材とした芸術である。絵画や文学は、目で見ること咀嚼、観察、評価、吸収することができるが、「音楽」は演奏した瞬間から消えてしまう時間的特性があるため、目に見えないものとして、音の「高低」「長短」「強弱」「遅速」を正しく知覚し、「体制化」し、「認識」する以外に咀嚼、観察、評価、吸収することができない。そこで重要になるものが「音楽の形式」の理解が必要となる。

感覚に偏った音楽の受容は、上滑りだけの趣味・道楽程度に留まる危険性があるため、聴覚が可能な限り、絵画や文学から得られる大きな指針を与えられることと同様に「音楽」からも多角的に学び、成果を得ることが大切ではなからうか？

4. <<特別講義について>>

第5回目より「楽器演奏におけるヴィブラート」と題し、音楽の演奏に欠かせないヴィブラートをどのように使っているか、さまざまな楽器奏者をお招きして、お話していただいた。

第5回は、東京カンマーコレージュのヴァイオリン奏者、ヴィオラ奏者、チェロ奏者、コントラバス奏者の方々において、ヴィブラートのかけ方がそれぞれ違うことがわかった。また、オルガンの場合、多くのストップにはヴィブラートはつかないが、ストップの周波数により、ヴィブラートをかける場合があることも紹介された。

表3

楽 器	ヴィブラートのかけ方
ヴァイオリン・ヴィオラ	下からかける
チェロ・コントラバス	上からかける

第6回は、フルート奏者の前田美保さんにヴィブラートについてお話いただいた。呼気圧の工夫や、唇の操作によって揺らすなど、演奏を交えながら説明していただいた。

第7回は、オーボエ奏者の本間正史さんにヴィブラートについてお話いただいた。

オーボエは、ヴィブラートにおいては、音を出し、エネルギーが減衰していく時からヴィブラートをかける場合が多い。クレッシェンドの時にヴィブラートをかけることはしないなど演奏を交えながら、説明していただいた。

第8回は、トロンボーン奏者の井上順平さんにヴィブラートについてお話いただいた。

トロンボーンは、唇が声帯の代わりをするため、振動体となる唇をつかってヴィブラートを作るなど、楽器を使いながら説明していただいた。

第9回は、声楽家のヴィブラートを研究する予定である。

5. <<最強の教材「カノン」とは、どんなものか?>>

音楽之友社「新音楽辞典」^[6]によると、「カノン」とは、「規則」「標準」を意味するギリシア語である。中世以来の音楽では、厳格なる模倣による対位法楽曲を指している。14世紀には、単旋聖歌より取られた定旋律が他声部によって終始厳格に模倣される「カノン風フーガ」と呼ばれる楽曲があり、この曲から現在のカノンへと発達した。

教育音楽学会では、カノンを教材の主軸においている。ワークショップでは、実際にいろいろなカノンを歌いながら、カノンの面白さを体験する。さらにカノンに合った歌詞を考えたり、和声進行に従って実際に自分でカノンを作詞作曲し、発表している。

また、カノンを実際に歌わせるためには、指揮法が欠かせない。拍子をとるための基本的な指揮法の他に、カノンをグループごとに歌い始めを指示し、フェルマータをかけて曲を終了する方法を学ぶことは、指揮法の基礎となるからである。

以下は、これまで取り扱ったカノン教材である。

表4 第1回～第8回 カノン課題^[7]

第1回カノン課題

No.	曲名	作曲者	作詞者
No.1	のびのび	M. ハウプトマン	伊万里 文
No.2	Row, Row, Row Your Boat		
	Hey, Ho, Nobody at Home	Pammelia, 1609	
	119 (In praise of God)	L. E. Gebhardi	Lob Gottes
	Let's Put the Rooster in the Stew		
	Farewell, Dear		
	Die C-Skala	Beethoven	
	Er ist da!	F. Kuhlau	
No.3	Alleluja	Mozart	
	Scherzo	Salieri	伊万里 文
	Dona nobis pacem (121 In praise of God)	Lob Gottes	
	The day 10	Tageskreis	
No.4	春がきた 春がきた	岡本敏明	岡本敏明
No.5	Lasciate mi morire		
No.6	練習曲1.2.3		
No.7	練習曲4.5		
No.8	練習曲6		
	練習曲7	Mozart	
No.9	Ave Maria	F. Wüllner	
No.10	Credo	Haydn	

※作詞者・伊万里 文は、本学会会長・岡本仁先生のペンネームである。

第2回カノン課題

No.	曲名	作曲者	作詞者
No.1	のびのび	M. ハウプトマン	伊万里 文
No.2	カノンと音階	T. Goodban	伊万里 文
No.3	スケルツォ	Salieri	伊万里 文
No.4	おやすみ (Bona Nox)	Mozart	水田 詩仙
No.5	Ave Maria	F. Wüllner	
No.6	レクイエムの一部	Mozart	
No.7	有限カノン		
No.8	アポロ讃歌	紀元前138年ごろ	
No.9	セイキロスのスコリオン	紀元前1世紀ごろ	
No.10	夏が来た (最古のカノン)	13世紀 (イギリス)	伊万里 文
No.11	Gloria X I Quoniam tu solus Sanctus	A. Vivaldi	
No.12	Gloria X II Cum Sancto Spiritu	A. Vivaldi	
No.13	森の音楽会	A. Banchieri	

第2回目では、No.4「おやすみ」というカノンに参加者それぞれが歌詞を考えた。

第3回カノン課題

No.	曲名	作曲者	作詞者
No.1	のびのび	M. ハウプトマン	伊万里 文
No.2	(課題曲)	フランス民謡	
No.3	新しき歌を歌え	P. Erunst Ruppel	
No.4	ハ調のハーモニー	J. Haydn	伊万里 文
No.5	メトロノーム	L. V. Beethoven	伊万里 文
No.6	やまびこ	Orland di Lasso	
No.7	はげしい雨	Anon.	伊万里 文
No.8	Row, Row, Row Your Boat	Anon. 19th century	
No.9	山に海に行こう	Anon.	伊万里 文
No.10	チンプンカン	M. Praetorius	伊万里 文
	Viva la musica	IVAN ERÖD	

※No.2は、通常「きらきら星」といわれるフランス民謡だが、通常の歌詞でなく、参加者が曲に見合う独自の歌詞を考える課題があった。

第4回カノン課題

No.	曲名	作曲者	作詞者
No.1	Viva La Musica (音楽万才)	M. プレトリウス	
No.2	Fruitful Fields		
No.3	Wir gratulieren	M. Hauptmann	
No.4		J. Haydn	
No.5	O YOUTH IS THE SEASON		伊万里 文
No.6	Gloria, Gloria	J. Haydn	
No.7	山に海に行こう	Anon.	伊万里 文
No.8	Adieu, Sweet Amaryllis	Wilbye 1598	
No.9	蟹のカノン	J. Brahms	
No.10	Round	HAYEN	
No.11,12	カデンツ、カノンの作曲		
No.13	Viva la musica	IVAN ERÖD	
No.14	Sanctus	13世紀 (イギリス)	伊万里 文

第5回カノン課題

No.	曲名	作曲者	作詞者
No.1	のびのび	M. ハウプトマン	伊万里 文
No.2	つばさあらば	Schumann	岡本敏明
No.3	山の朝	Schumann	
No.4	ローゼン フラ フン	デンマーク民謡	
No.5	おののひびき	中村 知	中村 知
No.6	楽しいキャンプの朝	ドイツ民謡	尾崎忠次
No.7	うらかな春の日	斉藤寿子	斉藤寿子
No.8	いとたけの	成田為三	明治天皇の詠める
No.9	さらば	パレスチナ民謡	萩谷 納
No.10	Die zehn Gebote der Kunst	J. Haydn	
No.11	The Crab	J. Brahms	

第6回カノン課題

No.	曲名	作曲者	作詞者
No.1	のびのび	M. ハウプトマン	伊万里 文
No.2	Dona nobis pacem		
No.3	かにの散歩	鈴木一郎	鈴木一郎
No.4	畑のとんぼ	清水 修	野口雨情
No.5	だるま	西山龍介	筑波秀夫
No.6	迎え火	清水 修	長田恒雄
No.7	祭りばやし	清水 修	清水 修
No.8	Freudlich des Lebens	Beethoven	
No.9	Auf den Erfinder des Metronoms	Beethoven	
No.10	Zum Tanz	Altfranzösisch	
No.11	Gloria	Beethoven	
No.12	夏が来た（最古のカノン）	イギリス曲	伊万里 文
No.13	やまびこ	Orland di Lasso	
No.14	Swing Low, Sweet Chariot	Orland di Lasso	

第7回カノン課題

No.	曲名	作曲者	作詞者
No.1	ほろほろやまどり	チェコスロバキア曲	遠山雅子
No.2	ことりのうた	成田為三	遠山雅子
No.3	朝の光	ジルヒャー	岡本敏明
No.4	つばさあらば	Schumann	岡本敏明
No.5	のびのび	M. ハウプトマン	伊万里 文
No.6	歌う小川	外国曲	西崎嘉太郎
No.7	歌うたう	イギリス古曲	岡本敏明
No.8	朝のかね	イギリス曲	西崎嘉太郎
No.9	セイキロスのスコリオン	紀元前1世紀ごろ	
No.10	夏が来た（最古のカノン）	13世紀（イギリス）	伊万里 文

※3部合唱を3声の輪唱（カノン）に編曲、4声の輪唱を混成4部合唱に編曲の課題をこなし、発表する。

第8回カノン課題

No.	曲名	作曲者	作詞者
No.1	のびのび	M. Hauptmann	伊万里 文
No.2	わかれのとき	Beethoven	不詳
No.3	O wie schön	M. Hauptmann	伊万里 文
No.4	ごきげんよう	Volkstümlich	伊万里 文
No.5	ナイチンゲールのカノン	J. Haydn	伊万里 文
No.6	乾杯のカノン	Mozart	緒園 涼子
No.7	来り、唄え	Mozart	伊万里 文
No.8	大笑いのカノン	L. Cherubini	伊万里 文
No.9	Sitzt a schön's Vogerl	J. Brahms	
No.10	ラウテを弾き、挙げよ盃	Schumann	緒園 涼子
No.11	うるわし五月よ	Schubert	岡本 敏明
No.12	山に登ろう	Komponist unbekannt	緒園 涼子
No.13	Auf, ihr Freunde	Hering	
No.14	Trara!	Volkstümlich	
No.15	Geburtstagswunsch	Mündlich überliefert	
No.16	Jagdruf	Volkstümlich	
No.17	Drei Gäns im Haberstroh	Mündlich überliefert	
No.18	Die Musici	Komponist unbekannt	
No.19	Ave Maria	Victoria	
No.20	CUM SANCTO (from Messa di Gloria)	Puccini	

No.13～15は、自由に歌詞をつけよう。

6.《修了曲について》

ワークショップでは、最後に、フーガの入った修了曲を歌い、演奏録音を行うことにしている。それは、音楽を理念、理論だけで捉えるのではなく、演奏という行為こそが、音楽を学ぶ上で重要であり、その感動こそが、人格形成に寄与する、という点に立脚しているからである。

各回の修了曲は、以下のとおりである。

表5 修了曲一覧

	修了曲 曲目
第1回	「ハイドン：ミサ曲より “Credo”」
第2回	「ヴィヴァルディ：Gloria “XI Quoniam tu solus Sanctus”」
第3回	「ヘンデル：Hallelujah」
第4回	「シューベルト：Sanctus」
第5回	「J. S. バッハ：Dona nobis pacem」
第6回	「スタイン：Gloria in Excelsis Deo」
第7回	「ヘンデル：Deborahより “Allelujah”」
第8回	「プッチーニ：Messa di Gloriaより “Cum Sancto”」

おわりに

今回は、教育音楽学会設立の経緯や、研修会（ワークショップ）の内容を時系列に羅列した感は否めない。

次稿は、本学の教育目標である、子どもを愛する心を持ち、「子どもと育つ」ことのできる、保育・福祉・幼児教育の専門職養成において、この「音育」の重要性について論考したい。

引用文献、及び資料

- [1] 小学校学習指導要領（文部科学省）P65、2007年（一部改正版）
- [2] 幼稚園教育要領・保育所保育指針・原本（平成20年3月）、チャイルド社、P23、2010年
- [3] 「想い出の曲集」P1、岡本敏明先生ご生誕100年記念パーティ準備会 編集発行、2007年
- [4] 「岡本敏明先生 国立音楽大学 最終講義（CD）」、岡本敏明先生ご生誕100年記念パーティ準備会 編集発行、2007年
- [5] 教育音楽学会ホームページ http://www.k5.dion.ne.jp/~e_music/
- [6] 「新音楽辞典」（音楽之友社 P140）
- [7] 第1回～第8回教育音楽学会ワークショップ テキスト（教育音楽学会 編集）

Summary

About “The Association for Educational Music”

Eri Takamaki

The contents instructed on the music teachers' training by musicians should be not only music skills and performance skills. About music education, especially in children, is necessary for the aspect of human education.

There is the philosophy of “Educational music”. In 2007, I have involved the establishment of the Association of Educational Music to aim to study the relationship among this philosophy, music education and human education. This paper states the substance of the establishment and activities about “The Association of Educational Music”.

Keywords ・ Educational Music
・ Oniku

(2011年5月19日受領)